

男子ラクロスにおける技術・戦術構造について

後藤 永行¹⁾ 竹田 唯史²⁾

緒言

ラクロスとは、男子は10人で行い、網のついたスティック(クロス)を用いてゴム製のボールをシュートし、互いに得点を競い合うゴール型のスポーツである。

ラクロスに関する研究は、体力・トレーニングに関する研究(飯田ほか, 1999; 谷所ほか, 2003・2005)、傷害に関する研究(馬淵ほか, 2005; 植田と入江, 2007)、キャッチとパス動作のバイオメカニクスの分析に関する研究(丸山ほか, 1997; 白木ほか, 2003)、不安と緊張に関する心理学的研究(大野と田島, 2004)、大学女子チームのマネジメントに関する研究(倉地と池田, 1997; 横山ほか, 2009)、栄養に関する研究(益田ほか, 2008)がある。指導に関する研究では、ソフトラクロスの体育授業への導入方法を提起した研究(齋藤と下永田, 2004)があるが、ラクロスの技術・戦術、指導に関する研究はほとんどされていないのが現状である。

国内で出版されているラクロスの書籍では、日本ラクロス協会(1994・2011)は、女子を対象とした指導書やルールブックを出版している。

田中(2006)は、ラクロスの各技法を詳細に紹介している。大久保(2012)は、試合の各局面における攻撃と守備の技術・戦術について説明している。

海外においては、ラクロスの技術や戦術に関する書籍が比較的多く出版されている。(David, U, 1988; Marry, B R, 2007; Carl R, 2009)。その中でもDavid and Neil(2006)は、ラクロスの試合での様々場面で用いられる技術や戦術を詳細に述べている。

しかし、これらの文献は、各技術・戦術が並列的に羅列されているのみで、技術と戦術の関係や各戦術の発展性など述べられておらず、構造化されているとはいえない。

以上の様に、ラクロスに関する国内外の文献を検討した結果、ラクロスの技術・戦術構造は未だ確立されておらず、研究の余地があると考えた。

学習者の技能レベルや技術習得の発展段階に合致した指導を行うためには、技術・戦術構造を明らかにする必要がある(井芹, 1991; 進藤, 2003; 竹田, 2010)。

そこで本研究の目的は、筆者の考える男子ラクロスの技術・戦術構造を提起することである。

研究方法

国内外で出版されている書籍の中でラクロスの技術・戦術について詳しく記述されている先行研究(田中, 2006; 大久保, 2012; David and Neil, 2006)の検討に基づき、筆者独自の技術・戦術構造を提起する。その際、「個別技術と集団戦術の相互関連」¹⁾「攻撃戦術と守備戦術の相互作用」²⁾の視点により構造化を試みる。

結果

筆者が独自に構想したラクロスの技術³⁾・戦術⁴⁾の構造を図1に示す。

筆者は、ラクロスの技術・戦術構造を「個人技法」⁵⁾「集団戦術」「個人戦術」の3つに大別し、それぞれに攻撃と守備を位置づけた。

「個人技法」のうち「個人攻撃技法」には、「スロー」、「キャッチ」、ボールを安定させるためにクロスを揺する動作の「クレードル」、地面に転がったボールを掬う動作の「スクープ」を位置づけた。「個人守備技法」には、「スタンス」「フットワーク」「プッシュ」「ホールド」「チェック」「クロスアップ」を位置づけた。ラクロスにおける基本的な技法を位置づけ、これらを土台とし、集団戦術の中で用いられる際に、「個人戦術」へと発展していくものと捉えた。

「集団攻撃戦術」では、「個人の突破」「2人のコンビネーションを用いた攻撃」「ポジションチェンジを用いた攻撃」「全体で協働した攻撃」の4段階を位置づけた。「集団守備戦術」には、「個人の守備」「コンビネーションを用いた守備」「場所を守る守備」「全体

1) 北翔大学大学院 2) 北翔大学

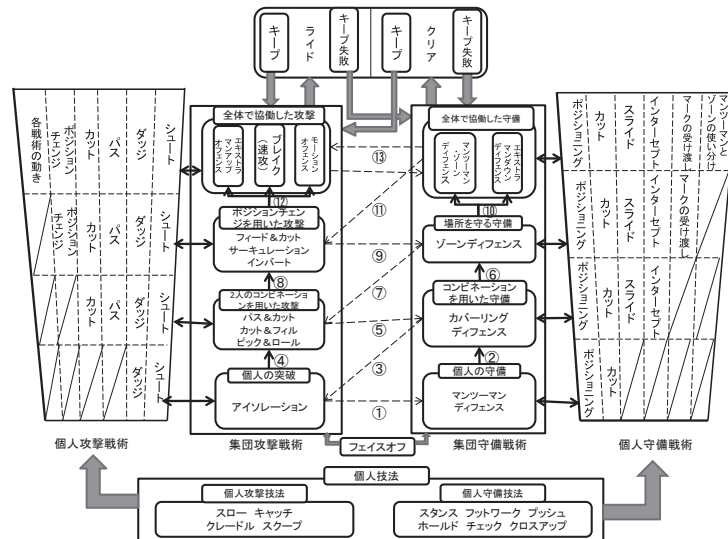


図1 ラクロスの技術・戦術構造

で協働した守備」の4段階とした。各段階は攻撃と守備の相互作用によって、「質的发展」が促されると捉えた。

それぞれの発展段階について述べる。集団攻撃戦術の最初の段階として「個人の突破」を位置づけた。ここでは個人の手で相手守備を突破する段階であり、集団戦術として「アイソレーション」を位置づけた。「アイソレーション」とは、個人の手で守備を突破し、シュートする戦術である。この段階における「個人攻撃戦術」には「シュート」「ダッジ」を位置づけた。「ダッジ」とはフェイントをかけて相手ディフェンスを抜く動作である(大久保, 2012, p.139)。

「個人の突破」に対し、守備は「個人の守備」を用いる(図中矢印①)。ここでは個人の守備で、ゴールを防ぐ段階である。「集団守備戦術」として、攻撃者1人に対して守備者が1人で守備を行う「マンツーマンディフェンス」を位置づけた。ここでの「個人守備戦術」として、「ポジショニング」「カット」を位置づけた。「ポジショニング」とは、自分のマークする相手がボールを持たない場合、「ボール・相手・自分の3点を結んだ線が三角形を描く」ように守備をすることである(日本ラクロス協会, 1994, p.95)。守備における「カット」とは、攻撃の「個人の突破」に対して、その方向を限定することである(大久保, 2012, p.76)。

攻撃側の「個人の突破」が守備を上回り、「個人の守備」では攻撃を防げない場合、守備は「コンビネーションを用いた守備」で対応する(図中矢印②)。この段階の「集団守備戦術」として、1対1で攻撃者に突破された時に、他の守備者が守りに行く「カバーリ

ングディフェンス」を位置づけた。ここでの「個人守備戦術」には、「個人の守備」の段階で位置づけた「ポジショニング」「カット」の他に、「スライド」「インターセプト」を位置づけた。「スライド」とは、「敵の突破に対し、他のディフェンスがカバーすること」であり(大久保, 2012, p.138)、「インターセプト」は、「相手チームのパスをカットすること」である(大久保, 2012, p.138)。また、「ポジショニング」と「カット」においても、「個人の守備」の段階に行われていたものから、守備者1人が抜かれた時にカバーしやすいように、意図的に味方の守備者がいる方向に向かわせる「ポジショニング」や「カット」を行うなど、味方と連携した動作となり、質的に高まる。

このように守備が強化され「個人の突破」では相手守備を崩すことができなくなると(図中矢印③)、攻撃側はもう一人の味方と協力して「2人のコンビネーションを用いた攻撃」の段階を行うこととなる(図中矢印④)。この段階での「集団攻撃戦術」として「パス&カット」「カット&フィル」「ピック&ロール」を位置づけた。「パス&カット」とは、ボールを持った選手がパスをし(パス)、フリーなスペースへ走り(カット)、再度ボールを受けてシュートする戦術である(田中, 2006, p.87)。「カット&フィル」とは、ボールを持たない選手がボールを持った選手からパスを受けるためにフリーなスペースに走り(カット)、ボールを持たない選手がカットしたことによってできたスペースを使って(フィル)シュートを狙う戦術である(田中, 2006, pp.86-87)。「ピック&ロール」とは、攻撃者をマークする守備者に対し、他の攻撃者が守備者

の横に立ち、壁となって進路を防ぐものである。また、ピックのために動いた選手が最初にいた場所にスペースができ、シュートチャンスを作ることでできる戦術でもある(田中, 2006, p.87)。ここでの「個人攻撃戦術」には、「個人の突破」の段階の「シュート」「ダッジ」に加え、「パス」「カット」を位置づけた。「カット」とは、「ディフェンスを引き離すテクニック」とされ(大久保, 2012, p.138)、ゴール前のフリーなスペースに走りこむことである。前段階で位置づけたシュートやダッジに関しても、「個人の突破」の段階のものから、パス方向やダッジを仕掛ける方向など味方の動きと連携した動作となり、前段階のものから質的に高まる。

攻撃側の「2人のコンビネーションを用いた攻撃」を「コンビネーションを用いた守備」で防げなくなると(図中矢印⑤)、守備は「場所を守る守備」へと発展する(図中矢印⑥)。この段階の「集団守備戦術」として、「ゾーンディフェンス」を位置づけた。「ゾーンディフェンス」は、人ではなく、決められた場所を守る守備である。それによって攻撃側がコンビネーションによってフリーなスペースを作りだしても対応することができる。ここでの「個人守備戦術」には、前段階の「ポジショニング」「カット」「スライド」「インターセプト」に加え、「マークの受け渡し」を位置づけた。「マークの受け渡し」とは、攻撃者の移動に対してマークする相手を変えることである。前段階に位置づけている「個人守備戦術」に関しても、「場所を守る守備」では、1人1人が守る場所を決められているため、隊形を崩さないよう「ポジショニング」を取り、自分たちの意図する方向に「カット」を行う。また、カットした方向に対する「スライド」とそれに伴って「インターセプト」を行うといったように陣形を維持したままでこれらの動作を行うこととなり、質的に高まる。

「ゾーンディフェンス」によって「2人のコンビネーションを用いた攻撃」が防がれると(図中矢印⑦)、攻撃はポジションを変動させて守備側を混乱させる「ポジションチェンジを用いた攻撃」で対応する(図中矢印⑧)。この段階での「集団攻撃戦術」として、「フィード&カット」「サーキュレーション」「インバート」を位置づけた。「フィード&カット」とは、ゴール裏からのボールに対してカットしてくる選手にパスをしてシュートする戦術である(David and Neil, 2006, pp.72-73)。「サーキュレーション」とは、「個人の突破」に合わせて、ゴール前や後ろにいる選手が

ポジションを変えて、シュートを狙う戦術である(David and Neil, 2006, pp.82-83)。「インバート」とは、ミッドフィルダーの選手がゴール裏にポジションを変えて、「個人の突破」を行う戦術である(David and Neil, 2006, p.88)。どの戦術もボールを持った選手、またはボールを持っていない選手がポジションチェンジを行って得点を狙う。この段階の「個人攻撃戦術」には、前段階の「シュート」「ダッジ」「パス」「カット」に加え、「ポジションチェンジ」を位置づけた。「ポジションチェンジ」とは、攻撃側の選手がポジションを変えることである。また、他の「個人攻撃戦術」に関しても、ポジションを変える動きや、守備の選手の位置を意識する動作となり、前段階より質的に高まる。

次に「ポジションチェンジを用いた攻撃」が「ゾーンディフェンス」の守備を上回ると(図中矢印⑨)、守備側は「全体で協働した守備」へと発展する(図中矢印⑩)。ここでの「集団守備戦術」として、「マンツーマン・ゾーンディフェンス」と「エキストラマンダウンディフェンス」の2つを位置づけた。「マンツーマン・ゾーンディフェンス」は、「カバーリングディフェンス」と「ゾーンディフェンス」を併用し、ボール所持者に対しては「個人の守備」が行われ、その他の守備者はカバーや攻撃側のスペースを埋めるような守備である。「エキストラマンダウンディフェンス」は、守備の反則により、人数不利で守るものである。その場合も全体で協働して守らなくてはいけないため、この段階に位置づけた。この段階の「個人守備戦術」は、前段階の「ポジショニング」「カット」「スライド」「インターセプト」「マークの受け渡し」に加え、「マンツーマンとゾーンの使い分け」を位置づけた。「マンツーマンとゾーンの使い分け」とは、攻撃側の動きに合わせ、人を守る守備と場所を守る守備を個人が使い分けることである。また、「場所を守る守備」と比較すると、人を守る守備と場所を守る守備を併用し、味方と連携を図りながら守備を変更していく。そのため、攻撃側の戦術を確認しながら、味方と連携を図るため「ポジショニング」「カット」「スライド」「インターセプト」「マークの受け渡し」に関しても質的に高まる。

「全体で協働した守備」によって「ポジションチェンジを用いた攻撃」が防がれると(図中矢印⑪)、攻撃側は「全体で協働した攻撃」へと発展する(図中矢印⑫)。ここでの「集団攻撃戦術」としては、「モーションオフense」「ブレイク(速攻)」「エキストラマン

アップオフense」を位置づけた。「モーションオフense」は、状況に応じて攻撃側の全員が行う「集団攻撃戦術」を選択し、全体が共有してそのための動きを行い、攻撃を展開するものである (David and Neil, 2006, pp.79-80)。また、守備時にボールを奪取し、人数有利で攻撃を展開する「ブレイク (速攻)」、守備側の反則によって人数有利で攻めることができる「エキストラマンアップオフense」をこの段階に位置づけた。この段階の「個人攻撃戦術」には、前段階の「シュート」「ダッジ」「パス」「カット」「ポジションチェンジ」に加え、「各戦術の動き」を位置づけた。「各戦術の動き」とは、状況や戦術に対応した個人の動きである。また、他の「個人攻撃戦術」に関して、全員が行う戦術を共有し、個人の役割を把握して動かなくてはならない。また、質的に高まった守備を崩すためにはパス動作の速さが求められる。これらのことから戦術を理解した上での技術や状況を踏まえた動作となり、質的に高まる。

このように、現代ラクロスでは、攻撃側は速いパス回しやポジションチェンジによってできた守備のズレを利用して個人の突破やそれに合わせて全体が動く「全体で協働した攻撃」を行い、守備側は、個人での守備を基本とし、守備を突破された場合は全体でカバーし合う「全体で協働した守備」を展開している (図中矢印③)。

まとめ

筆者は、先行研究 (田中, 2006; 大久保, 2012; David and Neil, 2006) の検討に基づき、男子ラクロスの技術・戦術構造を「個人技法」「集団戦術」「個人戦術」の3つに大別し、その内容について提起した。「集団戦術」においては攻撃と守備の発展段階を位置づけ、攻守の相互作用によって質的に発展していくものと捉えた。「集団戦術」の質的發展に対応するように「個人戦術」を位置づけ、「個人戦術」も質的に発展するものとし、ラクロスの技術・戦術を構造化した。

今後の課題としては、この技術・戦術構造に基づき対象者に応じた指導理論を展開することである。

注

- 1) デーブラーは「技術レベルは戦術的措置の選択と作用とに十分に影響を及ぼしている」と述べ、技術と戦術は相互に関連していることを述べている (デーブラー, 1985)。
- 2) 久世は「球技における諸種目の戦術を最初に特質づけるの

が、攻撃側の得点行動に対する反撃行動である。その後攻撃戦術は防御戦術が反撃行動へ移行することによって、必然的に質的發展を引き起こす。さらに攻撃戦術の発展が防御戦術の発展を促す」と述べている (久世, 1988)。

- 3) マイネルは、技術を「ある一定のスポーツの課題をもっともよく解決するために、実践のなかで発生し、検証された仕方」と述べている (マイネル, 1981)。
- 4) 内山は、戦術を「ゲームにおける技術的手段の応用ないし競技スポーツにおける競争のための一定の手続き、形態、方法及び手段の応用を目的とする『理論』とゲームの個々の局面での敵の行動やチームの隊形及び技術水準などの条件次第で個人的なものにも集団的なものにも成り得ることから、プレイヤーの勝利を得るための目的に適った『行動』の2つの観点から捉え、『スポーツ競争の指揮に関する理論』と規定し、その内容を『スポーツにおける競争の指揮の形態、可能性、手段及び方法』と述べている (内山, 2007)。
- 5) 近藤は、技法を「複数の客観的な個別技術によって構成されるひとまとまりの総体的運動形態」と規定している (近藤, 2012)。

参考文献

- Carl R. (2009) Carl Runk's coaching lacrosse, Mc Graw Hill.
- Daniel M. (2005) The Confident Coach's Guide to Teaching Lacrosse, The Lyons Press.
- David G.P, Neil A.G (2006) Lacrosse Technique and Tradition, The Johns Hopkins University Press.
- David U. (1988) LACROSSE Fundamentals for Winning, SPORTS ILLUSTRATED BOOKS.
- H.デーブラー：稲垣安二・上平雅史、谷釜了正訳 (1985) 球技運動学。不味堂：東京。
- 井芹武二郎 (1991) 平泳ぎの指導について。北海道大学教育学部紀要, 55: 187-205.
- クルト・マイネル：金子明友訳 (1981) スポーツ運動学。大修館書店：東京。
- 近藤雄一郎 (2012) アルペンスキー競技における技術・戦術指導に関する研究—初心者及び中級者を対象とした教授プログラムによる実証的研究—。北海道大学学院教育学院教育学専攻博士論文。
- 日本ラクロス協会監修 (1994) 女子プレイヤーのための初めてのラクロス。山海堂：東京。
- 大久保宜浩 (2012) ゼロから始めるラクロス。実業之日本社：東京。
- ロバート・E・レイノルズ：栗山英樹訳 (1993) ラクロスの基礎。ベースボール・マガジン社：東京。
- 進藤省次郎 (2003) バレーボールの初心者に対するパスの技術指導。北海道大学教育学部紀要, 89: 53-72.
- 田中 滋 (2006) ラクロス即上達バイブル。東邦出版：東京。
- 竹田唯史 (2010) スキー運動における技術指導に関する研究—初心者から上級者までの教授プログラム—。共同文化社：札幌。
- 内山治樹 (2007) スポーツにおける戦術研究のための方法叙説。体育学研究, 52 (2): 133-147.